

内容節における蓋然性を表す副詞について

九州大学文学部人文学科言語学専門分野 1LT08037R 清田早紀

1. 本論文で扱う問題

タブン / オソラク / キットは、一般に「蓋然性を表す副詞」と呼ばれているが、これらが内容節の中で使用された場合、(1)-(3)のように容認度が異なっている。本論文の目的は、(1)-(3)の違いを説明することである。

- (1) a. [彼女は**タブン** / **オソラク**騙されている]という**直感**を私は告げた。
b. [彼女は**キット**騙されている]という**直感**を私は告げた。
- (2) a. [彼女は**タブン** / **オソラク**騙されている]という**事実**を私は告げた。
b. *[彼女は**キット**騙されている]という**事実**を私は告げた。
- (3) a. *[彼女は**タブン** / **オソラク**騙されている]という**真実**を私は告げた。
b. *[彼女は**キット**騙されている]という**真実**を私は告げた。

2. 蓋然性の2つの対象

まず注目したいのは、同じ「蓋然性を表す副詞」といっても、その対象が異なるということである。

- (4) a. タブン / オソラクは、物事が起きる可能性を表す。
b. キットは、話者の判断の強さや確信度を表す。

(4)のように考える根拠としては、(5)のような構文において、タブンやオソラクが容認されず、キットだけが容認されるということが挙げられる (cf. 杉村(2009))。

- (5) a. { ***タブン** / ***オソラク** / ^{ok}**キット** } 生きて帰ってください。(依頼文)
b. 来年は { ***タブン** / ***オソラク** / ^{ok}**キット** } 京都に行こうと決意した。(意志文)
c. 家に帰ったら { ***タブン** / ***オソラク** / ^{ok}**キット** } 電話しなさい。(命令文)
d. 明日の放課後は { ***タブン** / ***オソラク** / ^{ok}**キット** } 遊びに行こうね。(勧誘文)
e. 毎日 { ***タブン** / ***オソラク** / ^{ok}**キット** } 朝7時に起きた。(知識表明文)

依頼文や意志文は、話者の意思や主張を表す文であって、物事の可能性を表す文ではない。だからこそ、タブンやオソラクは用いることができず、キットは使用可能なのである。

3. 節の3つの意味レベル

内容節は、意味レベルとして次の3種類があり、どの意味レベルになるかは主名詞によって決まっていると提案したい (cf. 南(1984)、田窪(1987))。

- (6) 「事態」 目の前で既に起こっている出来事を表す意味レベル
- 「事実」 目の前で起きている事に限らず、話者の主張や判断に関わらない意味レベル
- 「判断」 目の前で起きている事に限らず、話者の主張や判断に関わる意味レベル

(3)の「真実」は、その内容節の意味レベルとして「事態」をとる主名詞である。「事態」は、既に起こっている出来事を表すため、物事の可能性や話者の判断は関わることなく、タブン、オソラク、キットの全てが使用できない。(2)の「事実」は、その内容節の意味レベルとして「事実」をとる主名詞である。「事実」は、話者の主張や判断には関わらないが、目の前で起きている事には限らないため、物事の可能性を表すタブン、オソラクは使うことができる。(1)の「直感」は、その内容節の意味レベルとして「判断」をとる主名詞である。「判断」は、判断は物事の可能性から見た判断と、話者の希望や予想から見た判断があるため、タブン、オソラク、キットの全てを使うことができる。

- (7) a. 内容節の意味レベルが「事態」となる主名詞
真実・音・結果・経験・状況・仕打ち・行動・事故・措置・気配
 - b. 内容節の意味レベルが「事実」となる主名詞
事実・噂・絵・写真
 - c. 内容節の意味レベルが「判断」となる主名詞
直感・味・匂い・発言・希望・性格・例・予想・考え・思い・期待・思い込み・話・指摘
- (8) a. 学生のとくに{*タブン/*オソラク/*キット}農業体験をした経験が活きた。
 - b. 隣のクラスに{タブン/オソラク/*キット}転校生が来るという噂が流れている。
 - c. {タブン/オソラク/キット}昔食べたことのある味がした。

参考文献

- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』東京：ひつじ書房
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」 『日本語学』 6(5), pp.37-48. (田窪行則 2010 『日本語の構造 - 推論と知識管理 - 』東京：くろしお出版, 第1章 pp.7-39 に再録)
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京：大修館書店.